伊予市市場南組窯跡の研究

三　吉　秀　充

はじめに

朝鮮半島から技術的な影響を受けて生産が開始した初期須恵器の窯跡は，列島全体で約20基確認されている。愛媛県伊予市市場に所在する市場南組窯跡（以下，「市場窯跡」と記す。）はそのうちの１基である。2007年度，2008年度に，短期間ではあったが，愛媛大学考古学研究室（研究代表：三吉秀充）が市場窯跡３次調査・４次調査として小規模調査を実施し，調査の概要や成果について，幾度か報告を行ってきた（三吉2008・2009a.b.c)。しかし，いずれも発掘調査の成果報告が中心となり，十分な検討を行っていない。

そこで本稿では，発掘調査着手に至る経過と２回にわたる調査・研究成果の報告を行った後，現時点における検討を行い，今後の本格調査に向けた見通しを示したい。

１．発掘調査史の整理

(1) 市場窯跡の環境

市場窯跡は，松山平野の南西部，南から北にのびる丘陵上に展開する窯跡である（図１-１・写真１)。

市場窯跡が所在する伊予市内では，1990年代以降，四国縦貫自動車道松山自動車道建設に伴い，松山平野南部丘陵上を中心に多数の遺跡で発掘調査が行わ

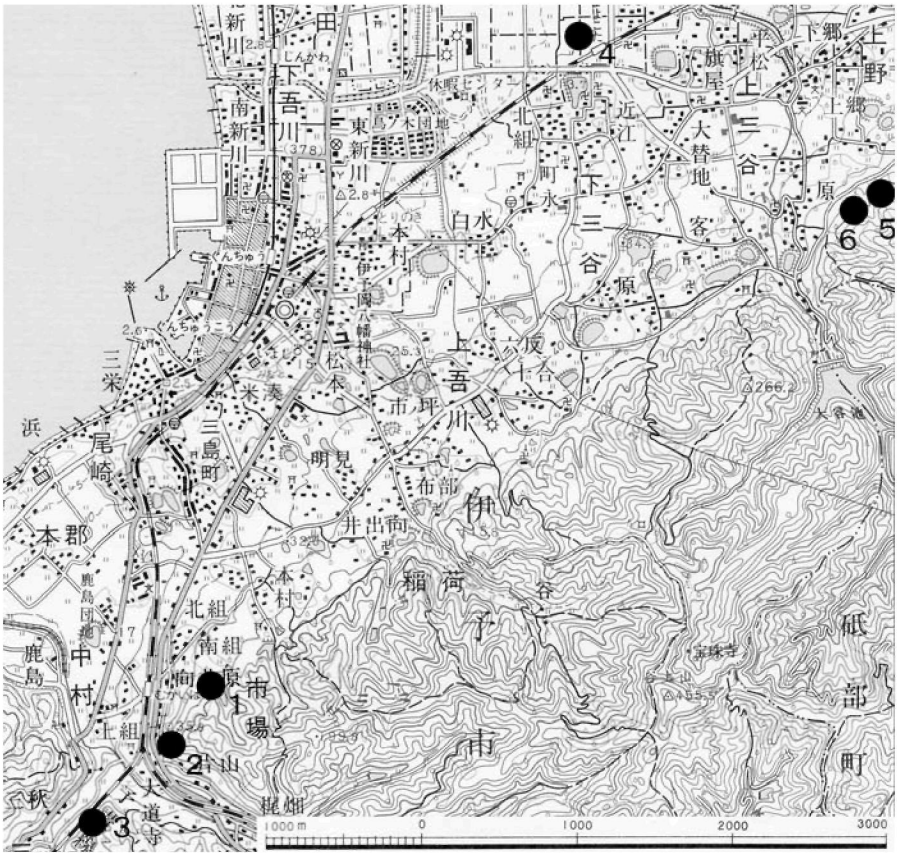

図１．伊予市市場南組窯跡周辺の遺跡分布図（国土地理院発行1:50000「郡中」を加工）

れている。また，市場窯跡周辺では，古代以前の窯業遺跡の調査が多数行われている。まず，市場窯跡から南西に約500mの地点に，７～８世紀に比定されるかわらが鼻窯跡（図１-２）が存在し，18基の窯跡を確認している。また，かわらが鼻窯跡からさらに南西の地点に，新池遺跡（図１-３）が所在する。新池遺跡では，７世紀前半から８世紀前半に比定される須恵器や瓦を焼成した窯跡を３基確認している。このように，市場窯跡周辺地域は，松山平野における主要な古代窯業生産地の１つであったことが窯業遺跡の立地からも窺える。

さらに，市内北部の太郎丸遺跡（図１-４），松山平野南部丘陵上に立地する猿ヶ谷2号墳（図１-５）や上三谷原古墳（図１-６）などでは，市場窯跡と関連する初期須恵器・陶質土器が多数出土している。市場窯跡ならびにその周辺地域は，初期須恵器段階の窯生産のみならず，古代松山平野における窯業生産と流通を研究する上での良好なフィールドと言える。

(2) 窯跡発見まで

初期須恵器窯跡の存在は，初期須恵器の生産を確実に示すものであるが，それ以外にも，初期須恵器の生産を示す場合がある。その一例が，特徴的な初期須恵器が，特定の地域に集中して出土する場合である。このような考え方によって，松山平野においても，1970年代後半頃から，初期須恵器生産の可能性について考えられ始めていた。その中で，1977～1978年，伊予郡松前町出作遺跡から出土した「地域色のある初期須恵器」に関する指摘（相田1983）が，文献として見られる最初のものと思われる。さらに，四国内の初期須恵器窯跡を整理した松本敏三（1984・1986）氏によって，「最近の調査事例には初期須恵器の出土が報じられ，地域色の濃い壷，高坏類が明らかにされた」(松本1986)として，「松山平野の特徴的な須恵器」の整理が行われた。そこで示された壷は，「球形に近い体部に屈曲して短く立つ口縁部を有す壷で，口縁端は平坦に整えられ，器表の上半は波状文とカキ目を交互し装飾する例が多く，体部下半は斜格子叩き目を残すなどの特徴がある。」とする。また，高坏は「陶邑古窯址群の最古期の高坏蓋を坏部とする器形，弥生後期の高坏を連想させる坏部のもの，土師器高坏と共通する器形の３種がある。」と指摘する。

以上のような「松山平野の特徴的な須恵器」は「出作遺跡の初期須恵器に初現し，壷は福音寺竹ノ下遺跡，畑寺古墳群，東野お茶屋台古墳群に継続し，高坏は上難波古墳群，五郎兵衛谷古墳群に後続を認めることが出来る。未だ少例であるが，５世紀後半から６世紀後半の約100年間に在地色の濃い器形が存続する事実は松山平野の未知の窯址での継続的供給を想定される。」と述べる。また，系譜問題にも触れ「同器形の壷は釜山堂甘洞９号墳，摂津の利倉西遺跡，

大和の布留遺跡に認められるが，口縁部を欠く釜山市の5世紀代古墳の出土例は器表の装飾原理，体部外面の叩き目成形痕まで一致する。」ことが指摘された。以上のように，松山平野内における特徴的な初期須恵器の存在が明確に示され，松山平野に初期須恵器の窯跡が存在すると想定されたのである。

待望の窯跡である市場窯跡は，1991年，畑を水田にするための整地作業中に偶然発見された。[1)]

市場窯跡発見に関する報告は，発見時に立ち会われた長井数秋氏の報告（1994）のみであり，以下では長井氏の報告を紹介しておく。

報告によれば，整地された地表面や掘削した崖面には，灰土に混じって須恵器片が散乱した状態であったという。水田の南側は，比高差約2ｍの崖面があり，その崖面には，窯体は見られないものの灰層や窯壁塊を確認したことから，重機によって掘削された部分が，灰原あるいは物原であったと想定されている。重機掘削地点南側の崖上の上は，当時，幅約2ｍの帯状の畑として利用されていたが，畑の南側にも比高差約1.5ｍの崖があり，その崖面に窯体の断面が露出しているのを発見している。なお，窯の基盤面は水平で，そこに須恵器片が2，3点遺存しているのを確認したと報告されている。これが市場南組1号窯跡である。また，以上のような過程で採集された遺物が，「市場南組1号窯跡出土遺物」である。

さらに，1994年，この1号窯跡の東50ｍの地点で，別の窯を発見し，市場南組2号窯跡と命名されている。長井氏によれば，2号窯跡も1号窯跡と所属時期はほぼ同じであると報告されている。

(3) 1次調査・2次調査

その後，窯跡が立地する丘陵の東部に，四国縦貫自動車道松山自動車道伊予インターチェンジが建設されることとなり，財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センターが，1993年（1次調査），1995年（2次調査）の計2回，発掘調査を行っている（図2）。

1次調査は，1993年11月，市場窯跡北西部，約450㎡を対象として5ヶ所の

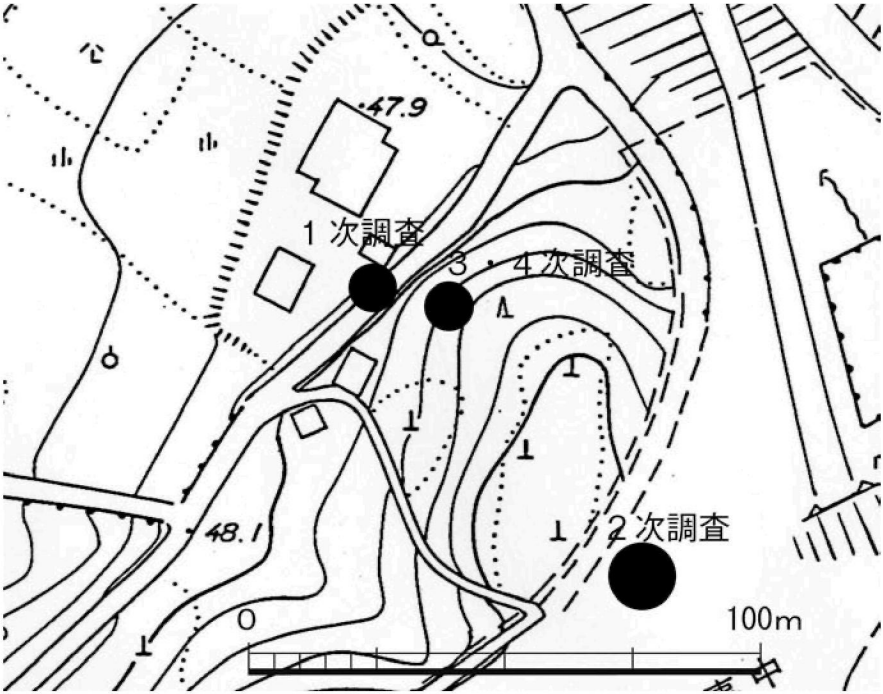

図2．市場窯跡における調査位置図

トレンチを設定し，土層の堆積状況を観察している（湖西ほか1995）。調査段階では，調査地は水田として利用されており，5地点とも10～30cmの耕作土の下には，赤褐色土の床土が堆積していた。地山は赤褐色土層であり，床土と地山との間には，暗灰褐色土が堆積しており，遺物，遺構は検出されていない。窯跡との関係からすると，暗灰褐色土については，灰原層の二次堆積層である可能性もある。

2次調査は，1995年4月～6月，市場窯跡から南東へ60m以上離れた地点で，約2400㎡を対象として発掘調査が行われている（作田ほか2000）。調査では，表土層の下位に土石流などに伴う二次堆積土層や人工的な盛土層などが確認できたのみで，窯跡に伴う遺構は検出されていない。なお，表土や盛土層から市

場窯跡で焼成されたと考えられる須恵器の高杯形器台片や壺片が出土している。

以上の2回にわたる市場窯跡における発掘調査は，窯跡で正式な発掘調査が実施された点，プライマリーな状況を保っていないが，窯跡で生産されたと考えられる初期須恵器が出土した点については，大きな成果と言える。しかし，窯跡，特に窯体や灰原の地点についての調査は行われず，従来通り，不明なままであった。[2)]

(4) 予備調査

このような状況の中，論者は，市場窯跡の現地見学や窯跡出土資料の見学などを通して，地元市場南組地区住民とやりとりする中で，市場窯跡の発掘調査の実施を要望された。これに応えるため，2005年度から2006年度にかけて，本格調査に向けた予備調査を実施した。予備調査では，まず窯跡，特に窯体や灰原の残存状況さえつかめていなかったことから，地下の埋蔵文化財の様子を探るためのレーダー探査（写真2）や窯跡周辺の正確な地形測量調査を実施し，発掘調査によらない窯跡の残存状況の把握に努めた。これら予備調査の結果，現地には2基の窯跡が崖面に並んで存在していることを確認すると同時に，窯体および灰原の一部が残存していることを想定できるようになった。これらの成果を受けて，2007年度，3次調査に着手したのである。

2．市場南組窯跡3・4次調査の成果

(1) 3次調査

3次調査では，窯の残存状況の確認を主目的として，測量調査と同時に窯の前庭部分に調査区を設け，発掘調査を行った。調査は，2007年4月28日から2007年5月20日にかけて実施した。発掘調査面積はのべ約10㎡である。

①測量調査

予備調査に引き続き，市場窯跡が所在する丘陵部について地形測量調査を実施した。地形の表面観察の結果，窯の天井部が崩落したと考えられる窪地を多

数確認できた。また，従来から，丘陵部の中程にある崖部に２つの窯体が認められていたが，崖部の表面清掃を行ったところ，南西部で新たな窯体を確認できた（写真３）。天井部はすでに崩壊あるいは欠損していた。さらに，窯体の還元層はすでに欠損し，赤褐色を呈した窯の基底部が明瞭に残存していることを確認できた。３次調査では窯体の現状確認に止め，土嚢およびビニールシートで養生を行い，今後の本格調査に備えることにした。以上の３基の窯については，窯体の横断面図の作成を行い，現段階における記録化を行った。

②発掘調査

上述のように丘陵部の中程に，丘陵を切断する形で崖部が見られ，崖部に窯体が３基並んでいることを確認できた。３基の窯跡の内，西側の２基の窯跡（３・４号窯跡）の北西部，つまり窯の前庭部と推定される地点に，北西－南東方向に１ｍの間隔を置いて，２つの調査区（１トレンチ・２トレンチ）を設定した（写真４）。

１トレンチは，南西－北東に6.5m，北西－南東に幅１ｍの調査区である。表土層を約10㎝掘り下げると，トレンチ中央部に基盤層らしき黄褐色土が現れた。また，調査区南西端部では，腐植土中から土器溜まりが出土した（写真５）。プライマリーな状況を保っていないが，壺・甕の胴部片を中心とした初期須恵器がほとんどであった。そこで，土器溜まりの見られた南西－北東に1.2m分ならびに中央部で検出した黄褐色土部分を除く，その他の地点に関してのみ，掘り下げを行った。

トレンチ中央部の南西側は南西－北東に１ｍ，北西－南東に幅１ｍの調査区となった。掘り下げを行ったところ，トレンチ北東壁付近で炭化物層の広がりが見られた。そこで，さらに北西－南東に0.5m，南西－北東に0.2mの先行トレンチを設定して，最深部で現地表下0.5mまで掘り下げを行った。掘り下げの途中，現地表下0.45mでしまりのある黄橙色土を検出した。調査時点では，基盤層の可能性を考えたが，黒褐色土が混じっており，二次堆積層と考えられる。

トレンチ中央部の北側は南西－北東に2.2～2.4m，北西－南東に幅１ｍの調

写真１

写真２

写真３

写真４

写真５

査区となった。調査区内を掘り下げると，調査区ほぼ全面に，窯壁の一部を含んだ炭化物・焼土の広がりを確認できた。これらの炭化物・焼土の広がりの性格を確認するため，北東壁に沿って南西－北東に幅0.3m，北西－南東に幅１mの先行トレンチ，さらにトレンチ北東隅に南北幅0.25m，東西幅0.15mの先行トレンチを設けて，現地表下0.6mまで掘り下げを行い，基盤層の可能性が考えられる黄褐色土の上層に暗褐色～黒褐色土の広がりを検出した。この暗褐

色～黒褐色土の広がりは，トレンチの北東に広がることを確認して，記録化を行い，埋め戻しを行った。

2トレンチは，南西－北東に3m，北西－南東に幅1mのトレンチであり，腐植土直下で黄褐色土を検出した。この黄褐色土は，基盤層とも考えられたが，黄褐色土にしまりがないことから，二次堆積層の可能性も考えられた。そこで，トレンチ北西壁・北東壁に沿って幅20cmの先行トレンチを設けて黄褐色土の一部を掘り下げることとした。その結果，黄褐色土の直下で黒色土を検出した。この黒色土は，灰原の可能性もあるが，今回は，黒色土上面の検出にとどめ，基盤層まで掘り進めていないことから，その性格は不明である。

以上のように，3次調査では，窯との対応関係は不明であるが，灰原あるいは灰原の再堆積層の一部を初めて確認することができた。

(2) 4次調査

前述のように，3次調査は，短期間の調査であったこともあり，発掘調査で検出した灰原の可能性が考えられる黒褐色土層に関しては，層上面の検出にとどまっていた。そこで，黒褐色土の残存状況を把握することを主目的として4次調査に着手することとした。あわせて，市場窯跡が所在する丘陵部について地形測量調査を実施した。なお，遺跡の保護を目的として3次調査で発見した須恵器窯跡の養生も調査期間中に実施した。

調査は，2008年3月27日から2008年4月3日にかけて実施した。発掘調査面積はのべ0.7㎡である。

①発掘調査

調査は，3次調査で設定した南西－北東に6.5m，北西－南東に1mの1トレンチ内の北東端部を再度掘り下げていくこととした（写真7）。3次調査終了時に，遺跡保護のためトレンチ内に土嚢を敷き詰めており，調査はこの土嚢を取り除くことから開始した。土嚢を取り除いた後，トレンチ北東壁に沿って北西－南東に幅1m，南西－北東幅に0.6mで先行トレンチを設定し，掘り下げを行った。掘り下げ直後，現地表下55cmで，土壙の掘り形ラインを検出した

写真６

写真７

写真８

写真９

写真10

写真11

(写真８・９・10)。

土壙は，トレンチ外へと続いており，正確な形状は不明であるが，検出状況から楕円形状を呈すると考えられる。土壙の深さは約35㎝で，土壙内から，須恵器片が少量出土している。須恵器の大半は壺あるいは甕の胴部片であるが，いずれも初期須恵器であり，土壙も初期須恵器段階のものと考えられる。

土壙が掘り込んでいる黄褐色土はしまりがあり，基盤層の可能性も考えられ

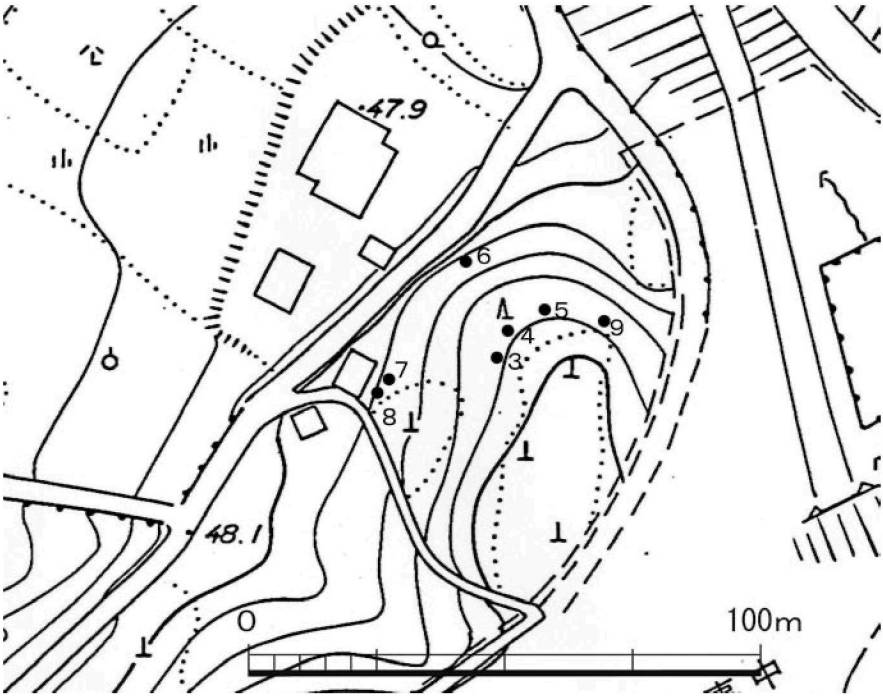

図３．市場窯跡における窯跡分布図

た。確認のため，トレンチ北東壁にそって南西－北東に幅10㎝で断ち割り調査を行った。すると基盤層と考えていた黄褐色土中から炭化物片などが出土し，現地表下１ｍで炭化物層の広がりを確認できた。断ち割り部分が幅10㎝と幅狭であり，現地表下1.2ｍまで掘り下げ，炭化物層下で明黄褐色土層を確認した時点で，掘り下げを停止した（写真11)。炭化物層下で検出した明黄褐色土が，二次堆積層であるのか，基盤層であるのか，現時点では確定できない。ただし土壙の下部には，間層をおいてさらに炭化物層が続いていることを確認できた点は，大きな成果と言える。

②地形測量調査

予備調査ならびに３次調査で実施した地形測量に継続して，窯跡北東部なら

びに南部で追加の測量を行った（写真６）。

(3) 窯跡番号の整理

市場窯跡では，前述のように長井数秋氏によって確認された窯跡の１つに「市場南組１号窯跡」と窯跡名が付与され，窯跡発見時に採集した須恵器に関しても「市場南組１号窯跡出土須恵器」と呼ばれている。また，長井氏の報告によれば東へ50mの地点に「市場南組２号窯跡」も存在するとされている。

さて，愛媛大学考古学研究室による市場窯跡予備調査ならびに３・４次調査における地形測量調査の成果から，市場窯跡周辺では７基の窯跡の存在を確認できている。これまで窯に特定の番号を付与していなかったが，ひとまず整理を行っておきたい。

これまで窯跡名を付けられている１号窯跡あるいは２号窯跡との関係，「市場南組１号窯跡出土須恵器」と１号窯跡との対応関係などの問題を考慮して，仮に新しく３号窯跡から９号窯跡までの番号を付与した。１号窯跡と２号窯跡は，現時点では，欠番とし，今後新しい窯跡を検出した際には，10号窯跡から番号を付与する予定である（図３）。

以下で，３号窯跡から９号窯跡の概要について述べておきたい。

３号窯跡は，崖面にならび窯跡の内，３次調査で新しく検出した窯跡である。

４号窯跡は，崖面にならぶ窯跡の内，３号窯跡の東に約３ｍの地点に位置する窯跡である。

５号窯跡は，崖面にならぶ窯跡の内，４号窯跡の東に約７ｍの地点に位置する窯跡である。

６号窯跡は，道路の法面にかろうじて煙出し付近と考えられる落ち込みが残存する。落ち込み内の崩落土中には焼土塊などが見られる。

７号窯跡は，窯跡が展開する丘陵の南西部に位置する窯跡で，煙出し付近と考えられる落ち込みを確認した。

８号窯跡は，７号窯跡の南に隣接し，７号窯跡同様に，窯跡が展開する丘陵の南西部に位置する窯跡で，煙出し付近と考えられる落ち込みを確認した。

9号窯跡は，窯跡が展開する丘陵の北東部に位置する窯跡で，窯跡の焼成部下部が残る。現在，墓地の階段として利用されている。

3．3・4次調査成果をめぐる若干の考察

これまで，市場窯跡3・4次調査について報告を行った。須恵器の窯跡は，大きく窯体（焚口部・燃焼部・焼成部・煙出し部）と窯で焼成を行った際に生じた不良品や燃料の残骸の集積である灰原とから構成されており，市場窯跡3次調査では，窯体の測量調査と灰原と推定される地点の調査，4次調査では，灰原と推定される地点の調査を行ったことになる。以下では，3・4次調査成果の意義，窯体構造，灰原について現時点における検討を行いたい。

(1) 発掘調査の意義について

まず，窯体の調査について考えたい。これまでにも，市場窯跡では，窯体の存在は知られていた。しかしながら，窯体の残存状況に関する報告は行われてこなかった。長井氏による市場窯跡発見に関する報告も，工事中という不時発見の経緯と採集遺物に関するものが中心となり，窯体の存在にはふれられているものの，詳細な報告が行われなかった。長井氏による報告の後，市場窯跡は，西日本を中心として各地に展開する初期須恵器の窯跡の1つとして，論文や一般向けの書籍に紹介されるものの（植野1994，菱田1996など），具体的な論及はされなかった。その結果，初期須恵器研究においては，採集遺物の評価が行われるだけで，窯跡の存在を疑問視する研究者もいた。

そのような中で，市場窯跡の残存状況に関する情報の共有化を目的として，予備調査ならびに発掘調査を開始したのだが，現段階における窯体の残存状況に関する記録化を行えた意義は大きい。また，初期須恵器の窯跡のみならず，古墳時代後期～古代に位置づけられる須恵器の窯跡，あるいは瓦窯跡の存在を確認できたことも成果の1つである。これまで長井氏によって採集された遺物の中には，初期須恵器段階以降のものであるが，陶邑窯，あるいはその系譜を

うかがえる須恵器が存在した。この須恵器がどこで焼成されたものであるのか，問題となっていた。今回の調査で，市場窯跡に初期須恵器段階の窯跡だけでなく，それ以降に位置づけられる複数基の窯跡が存在していることが明らかになったことにより，上述の問題も解決されると考えられる。

(2) 窯体構造について

次に，市場窯跡の窯体構造について検討を行いたい。初期須恵器段階の窯体構造に関する研究は，近年，植野浩三（1999・2003）や藤原学（1997），渡辺一（2007）の各氏らによって整理・検討が行われている。ここでは，植野浩三氏による整理を参考にしながら，市場窯跡の窯体構造について現状の評価を行っておきたい。

植野氏によると，窯体平面形，燃焼部・焼成部規模，主軸立面形態，焼成部後端部形態，煙出し形態などの属性を分類した結果，初期須恵器段階の窯体構造には，「直線型」と「曲線型」という2種類の窯跡が存在すると言う。なおこの「直線型」と「曲線型」という2種類の窯跡は，各属性の違いだけではなく，「直線型」から「曲線型」へという時期的な違いとして存在すると指摘されている。植野氏の指摘する「直線型」と「曲線型」は，以下の通りである。

「直線型」とは，煙出しを除いた窯体平面形態が，直線的で寸胴，燃焼部・焼成部は，長さ8m未満，幅2m未満の小型の窯である。窯体の主軸立面形態は直線的な傾斜で，焼成部後端部形態は屈曲して立ち上がり，煙出しは煙突形の形態をするという。植野は「直線型」の窯跡として，福岡県京都郡みやこ町居屋敷窯跡，岡山県総社市奥ヶ谷窯跡，大阪府吹田市吹田32号窯跡，大阪府南河内郡河南町一須賀2号窯跡，さらに可能性のあるものとして香川県高松市三谷三郎池西岸窯跡を該当窯跡として提示している。

一方「曲線型」は，煙出しを除いた窯体平面形が曲線的で焼成部が膨らみ，燃焼部・焼成部は長さ10m以上，幅2.4m～2.6mと，「直線型」のものより大型である。窯体の主軸立面形態は曲線的傾斜で，焼成部後端部は曲線で連なり，煙出しと一体形の形態をとる。「曲線型」の窯跡として，大阪府和泉市濁り池窯跡，陶邑窯跡群内TK73・TK85・TK87号窯跡などを該当窯跡として提示し

ている。

では，次に，市場窯跡で検出した窯体の位置づけについて考えてみたい。市場窯跡３・４次調査の成果から，市場窯跡では，少なくとも7基の窯跡が存在する。まず，この中から初期須恵器段階の窯跡を特定しなければならない。しかし，これら７基の窯跡には，須恵器が残されているわけではなく，これ自体で時期比定することは難しい。そこで参考となるのが，３・４次調査１・２トレンチで検出した灰原あるいは灰原の再堆積層と考えられる黒褐色土層の分布である。この灰原あるいは灰原の再堆積層と考えられる黒褐色土層からは，初期須恵器段階と考えられる須恵器しか出土しておらず，当該時期に位置づけられるものである。この黒褐色土層の分布地点と窯跡の対応関係を考えると，少なくとも３号窯跡あるいは４号窯跡が，初期須恵器の窯跡である可能性が高い。ただ，３号窯跡を，初期須恵器段階の窯跡とした場合，窯体の床面傾斜角度がかなり急であることから，本稿では，４号窯跡を初期須恵器段階のものとして，検討しておきたい。

先に見たとおり，植野氏は，初期須恵器の窯跡を検討する属性として窯体平面形，燃焼部・焼成部規模，主軸立面形態，焼成部後端部形態，煙出し形態を重視している。検討対象である市場４号窯跡は，崖面に窯体断面が残されている。この崖面における観察からすれば，窯体のうち，焼成部の大半は欠損し，煙出し部と煙出し部に近い焼成部の奥側の一部が残存しているものと推定される。この崖面における４号窯跡の焼成部幅は，約１ｍである。煙出し部に近い焼成部が残存しているとは言え，初期須恵器の窯跡の中でも小型のものと言える。

これまで再三述べてきたように，４号窯跡は，窯体の大半を欠損している。しかし，３・４号窯跡の前庭部に設定した２トレンチの調査成果を参考にすると，窯体の全長を推定することができる。

２トレンチでは，表土層直下でしまりのない黄褐色土を検出し，さらにその下部で灰原の可能性もある黒色土を検出している。基盤層まで掘り下げていないので，断言はできないが，少なくとも窯の燃焼部あるいは焼成部と考えられ

る遺構は確認できていない。すなわち，現状のデータからすると，2トレンチ地点まで，窯体の焼成部・燃焼部が及んでいない可能性が高い。4号窯跡の残存する崖面と，2トレンチ調査地点との地形環境からすると，4号窯跡の燃焼部・焼成部の全長が，10m以上になるとは考えにくい。

以上のように，市場窯跡4号窯跡を，燃焼部・焼成部の規模という属性から判断すると，現段階では，植野氏の分類の中で「曲線型」に該当する可能性が高い。今後，植野氏が提示した窯体平面形，燃焼部・焼成部規模，主軸立面形態，焼成部後端部形態，煙出し形態などの属性を検討し，「直線型」となるのかを考慮しながら，窯体の調査を行う必要があろう。

(3) 灰原について

次に灰原の位置づけについて考えておきたい。

前述のように窯体のデータ同様，長井氏の報告以外に，市場窯跡の灰原の残存状況に関する報告は行われてこなかった。

そこで，市場窯跡3・4次調査では，灰原層の確認を目的として，3・4号窯跡の前庭部と推定される地点に，1トレンチと2トレンチの2調査区を設定し，調査を行った。調査の結果，1トレンチ，2トレンチともに表土層下で灰原あるいは灰原の再堆積層と考えられる黒褐色土層を確認した。

特に，1トレンチ北東端で検出した土壙と，間層を置いて下層で確認した炭化物層については，今後に向けて期待できる成果である。調査最終段階における確認のため，基盤層の確認ができなかったが，現時点では，下層の炭化物層が堆積し，時間差を置いて，土壙が掘り込まれた可能性を想定しておきたい。これらの堆積状況は，市場窯跡の操業期間を検討する有効な資料となる可能性が高い。現状では，出土した遺物の点数が少ないことから，十分な検討ができないが，今後，面的な調査を行い，上層資料と下層資料とが比較可能となれば，市場窯跡で焼成された須恵器などの変遷についても実証的に検討できるであろう。

以上，憶測を重ねすぎた感もあるが，何よりも窯跡を構成する窯体と灰原を

考古学的手法に基づいて確認できたことにより，市場窯跡において，確実に初期須恵器が生産されていたと言える。

これまで，市場窯跡から出土した資料はあるものの，資料の出土状況が明らかになっていなかったため，「もの」以上の評価ができなかった。しかし，3・4次調査における，考古学的手法に基づいた発掘調査によって，「もの」以上の評価，すなわち，市場窯跡（の灰原などの）出土資料として，資料操作できることになった。ようやく，遺構・遺物を含めて市場窯跡を考古学的に位置づけることできるようになったのである。

しかし，トレンチ調査ということもあり，黒褐色土層の面的な広がりはつかめていない。今後，面的な調査を行うことにより，黒褐色土層の広がりや堆積状況について正確な情報を得る必要があろう。

結　び

本稿では，まず，市場窯跡における発掘調査史の整理を行い，市場窯跡3・4次調査着手に至る経緯について述べた。さらに，市場窯跡3・4次調査の概要について述べた後，調査成果の意義，窯体構造，灰原層について考察を行った。その結果，窯体構造については，窯体の燃焼部・焼成部規模の検討から，植野氏による分類の「曲線型」に該当する可能性が高く，灰原層については，良好な状況で残存しており，今後の調査成果によっては，市場窯跡における操業期間についても言及できることを指摘した。

さて，本稿の冒頭でも述べたように，市場窯跡と同時期の窯跡，すなわち初期須恵器段階の窯跡は，列島全体で約20基確認されている。この20基の窯跡の中で，窯体と灰原がセットで確認できる事例は，大阪府陶邑窯跡群を除くと，福岡県小隈窯跡，山隈窯跡，大阪府一須賀二号窯跡例など少数の例に限られる。発掘調査が行われている初期須恵器窯跡の多くは，窯体が確認されたか，もしくは一部確認された例がほとんどであり，対応する灰原はすでに削平されていたという事例が多い。窯跡は，窯体と灰原から構成されているものであり，窯

体もしくは灰原だけの分析では，自ずと限界がある。理想論ではあるが，窯体と灰原，さらに須恵器工人の集落などを含めた検討が必要と言えよう。窯体の大半あるいは一部が破壊されているとは言え，窯構造の一部を確認でき，しかも灰原が良好な形で残存していると想定される市場窯跡は，初期須恵器窯跡の実態を知る上での貴重な資料と言えるのではなかろうか。今後も，市場窯跡の調査・研究を通じて，初期須恵器段階における地方窯跡の実態解明に努めたい。

付　記

※本稿は，中国四国歴史学地理学協会2009年度愛媛大会考古学部会（2009年７月５日（日））において「伊予市市場南組窯跡３・４次調査について」と題して発表した内容に，その後の知見を加えて文章化したものである。

※本稿は，平成21年度愛媛大学法文学部人文系担当学部長裁量経費採択プロジェクト「考古資料に基づく地形環境と遺跡立地に関する実証的調査研究」（研究代表者：三吉秀充）の成果である。

謝　辞

本論を草するにあたって，伊予市教育委員会，愛媛大学考古学研究室，市場南組の皆様に，測量調査・発掘調査の実施や資料収集で大変お世話になった。記して深甚の謝意を表する次第である。

注

1）遺跡台帳によれば，市場窯跡周辺では，1988年前後から遺物採集が行われていたようである。

2）出現期から８世紀中葉頃までを中心とした須恵器窯の全国的な集成が行われた『須恵器

窯構造資料集１―出現期～８世紀中頃を中心にして―』（窯跡研究会編，1999年）においても，市場窯跡の「窯体は確認されていない。」と報告されている。

参考文献

植野浩三1994「古墳時代中期の手工業生産と政治秩序―須恵器生産の展開を中心にして―」『文化財学論集』文化財学論集刊行会

植野浩三1999「初期須恵器窯の構造的特徴」『瓦衣千年　森郁夫先生還暦記念論文集』

植野浩三2003「日韓古代窯跡調査の動向」『奈良大学総合研究所所報』第11号

湖西一成・藤田義之・今井浩次・上田正広・和田賢・白石将高・伊藤嘉浩・中村健・越智真次・林奈美・川添敬三・田中伸子1995『四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書ＸＩ』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター

作田一耕・多田仁・成田淳2000『新池遺跡・市場南組窯跡　四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書ＸⅣ―伊予市編Ⅲ―』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター

相田則美1983「古墳中期の祭祀遺跡－愛媛県出作遺跡－」『季刊考古学』第２号，雄山閣出版

長井数秋1992「松山平野の須恵器編年」『愛媛考古学』第12号，愛媛考古学協会

長井数秋1994「伊豫市市場南組１号窯跡出土の須恵器」『ソーシアル・リサーチ』第20号，ソーシアル・リサーチ研究会

菱田哲郎1996『須恵器の系譜』講談社

藤原学1997「窯構造からみた須恵器の伝来」『堅田　直先生古希記念論文集』真陽社

松本敏三1984「四国地方」『日本陶磁の源流－須恵器出現の謎を探る』柏書房

松本敏三1986「四国地方の須恵器窯」『月刊考古学ジャーナル』第259号，ニュー・サイエンス社

三吉秀充2008「西部瀬戸内における初期須恵器窯の実態解明－伊予市市場南組窯の調査・研究－」『第２回瀬戸内海文化研究・活動助成報告書〈平成19年度〉』財団法人福武学術文化振興財団

三吉秀充2009a「伊予市市場南組窯跡３・４次調査の成果と課題」『伊豫市の歴史文化』第60号

三吉秀充2009b『平成19年度第２回法文学部人文系担当学部長裁量経費成果報告書―共同研究の部―愛媛県における初期窯業生産史の実証的研究』

三吉秀充2009c「伊予市市場南組窯跡３・４次調査について」『中国四国歴史学地理学協会2009年度大会（愛媛大学）考古学部会』（口頭発表）

渡辺一2007「〈古墳時代〉須恵器窯の構造変化と技術の伝播」『季刊考古学』第100号記念増大号，雄山閣出版